

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第9話】

みなぎし  
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（30）：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

ニユンリン：魔族

シャーニューニダ：魔族

タールク（28）：宵闇騎士

オパピア（25）：社長令嬢

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア  
の王女

○プリマダンケ城下町・住宅街

タールク（２８）「はあっ！」

タールク、縦横無尽に素早く移動し、

暴走機械を斬り伏せる。

タールク「オパピアには指一本触れさせない

……散れ！」

タールク、静かな怒りの表情になる。

タールクを見つめるオパピア（２５）。

オパピア「わああ……」

タールク「オパピア！ 大丈夫か！？」

タールク、オパピアのもとに駆け寄り、

がしつと肩を掴む。

オパピア「あ、うん……ごめん、ぼーっとし

てて」

タールク「ここらはあらかた片付いた。王女

様とシャーザベスラさんたちのもとへ戻ろ

う」

タールク、オパピアの手を取り、

オパピア「あっ」

タールク「行くぞ」

そのまま走り去る。

※ ※ ※

（フラッシュ）

笑顔のオパピア（5）、きよんとする  
タールク（8）の手を握って走る。

※ ※ ※

オパピアM「あの時みたい……」

オパピア、くすつと笑う。

○タールク宅前

シャーザベスラ「よかった、とりあえず暴走  
はおさまったみたいだ」

アルノ・ヨナ「なにがなんだか。原因不明な  
のヨナ」

チビィ「怖かったぞ……」

チビィ、ぷるぷると震えている。

タールク「なんとか鎮圧できたようだ」

オパピア「そうね」

○タールク宅・居間

4人が座り、チビイはシャーザベスラの肩に乗っている。

タールク「さきほどはうやむやになってしまいましたね。それで、どうするか決まりましたか？」

チビイ「何の話だっけ？」

シャーザベスラ「どうやってルチェリールたちを助けるかって話さ。たとえば決闘の場合、志願者は犯罪歴などがあつてはならない。あくまでいい人に、この人は無罪です！　って言ってもらわなきゃいけないんだ」

シャーザベスラ、チビイをなでなでする。

シャーザベスラ「で、みんな聞いて。僕、考えてみたんだけど……」

シャーザベスラ、自分が考えた案を共有する。

タールク「わかりました。では、私はここで待っていますので3人は志願に行ってきて

ください」

チビィ「おまえは来ないのか？」

タールク「……」

タールク、返事をしない。

シャーザベスラ「チビィ、行くよ」

シャーザベスラ、チビィを抱っこする。

タールクを残し、3人とチビィは部屋を出る。

タールク「あのチビィって子は純粹無垢っぽいから、ちよつと言いつらかったな……ふう」

タールク、息を吐き出す。

○地下牢・通路

T「数日後」

兵士長、通路を歩いている。

ルチェリールタたちがいる牢獄の前に立つ。

○同・牢獄内

兵士長の声「おまえたちに朗報だ。決闘の申し込みが行われた、出る」

扉の向こうから声が聞こえてくる。

兵士長の声「出る前に自分たちで手錠をしろ。あと、食事を摂れ。これは公平を期すためだ」

中に手錠が投げ入れられ、食事が置かれる。

ルチェリールタ、それらをじっと見つめる。

#### ○同・通路

兵士たちが、3人に槍を向けている。

兵士長「本来は裁判が1月後に行われるが、お前たちの無罪を求めて決闘志願書が提出された。こちらがあらかじめ用意した戦士に勝てば、無罪放免だ……よかったな、お前たちを善人だと信用する仲間がいて」

兵士長、歩きながら3人に説明する。

ルチェリールタ「決闘……」

ニユンリン「あーしも闘うの？」

シャーニューニダ「並みの人間に負けはしない」

兵士長「志願書を提出したのはアルノ・ヨナ様とシャーザベスラ様、ならびにオパピア令嬢だ。地位と信用が折り紙付きだから、勝てば悪い噂もほぼ完全に消えるだろう」

その言葉に、シャーニューニダは鋭い視線を向け、

シャーニューニダ「それはいいが、決闘の結果は報道してくれるんだろうな？」

と、問いかける。

兵士長、自分の懐を探る。

兵士長「これがその誓約書だ」

兵士長が取り出した紙には、決闘の結果にかかわらずそれを報道する旨が書かれている。

ルチェリールタ「正式な誓約書みたいですね。

ニユンリン、安心していいよ」

ニユンリン「うん……」

ニユンリン、不安そうな表情で返事。

○闘技場・待機室

扉が開けられ、3人は待機室へ入室。

3人は手錠をされたまま。

男A「ご説明をいたします。決闘は1対1。

こちらが用意した戦士と闘い、降参させたら勝利です。あなたたちが降参はできません。相手戦士を殺したら問答無用で死刑となります。相手とは、1日1人まで勝負できます……それともちろん、観客含め非戦闘者のリングへの侵入は禁止されています」

男、3人を見る。

男A「では、最初の挑戦者を決めてください」

3人、向かい合う。

しばらくして。

ルチェリールタ「私が行きます」

男A「では、こちらへ。手錠を外します」

○同・屋外

客席が人でうめつくされている。

その中に、シャーザベスラ、ヨナ、チ  
ビイ、オパピアの姿が。

チビイ「大丈夫かなあいつ……」

○（回想）タールク宅・居間

シャーザベスラ、チビイをなでなです  
る。

シャーザベスラ「で、みんな聞いて。僕、考  
えてみたんだけど……決闘を申し込もうと  
思う」

チビイ「なんでだ？」

シャーザベスラ「早めに解放してあげたいか  
らさ。そして、被告人を無罪にしてって言  
った志願者が闘えるルールがあるけど……  
僕たちじゃなく本人に闘ってもらおう」

タールク「なぜですか」

シャーザベスラ「本人たちが悪人じゃないつ  
てことを、直接感じてもらいたいからさ。  
実際、そういうところを見られるんじゃない

いのかな？」

（回想終わり）

○闘技場・屋外

チビィ「あ、来た！」

ルチェリールタ、リングの端の扉から出てきて闘技場中心へ。

チビィ「相手は誰なんだ？ あいつだから誰にでも勝てそうだけど……ってか、国民たちはこれ楽しんでんのか？ 怖いぜ……」

シャーザベスラ「いや、この国の行く末が気になるんだろ」

チビィ「……」

チビィ、小刻みにふるふる震えている。

シャーザベスラ、チビィをそつと надаでする。チビィの震えがおさまる。

ルチェリールタが出てきた扉と反対側の扉が開く。

ルチェリールタ「あの人……」

ルチェリールタ、はっとした表情にな

る。

チビィ「あ、あいつ……！」

扉から出てくるタールク。

チビィ「タールクじゃないか！」

シャーザベスラ「そうなんだ。でも、こうで  
もしないとあと後遺症……悪い噂が残  
ると思って。だけど、あいつらなら勝てる  
さ。ルチェリールタより弱いニコポレルク  
でさえ、タールクより上のプリマダンケ騎  
士団長なんだから」

シャーザベスラ、リングの2人をじつ  
と見つめる。

ゆっくり歩き、闘技場の中心へ。

ただ2人、巨大なリングで向かい合う  
ルチェリールタとタールク。

タールク「お久しぶりですね……またあなた  
と手合わせすることになるとは」

ルチェリールタ「ふう」

ルチェリールタ、息を吐き出す。

タールク「ずっと憧れでした。力が強く品行

方正、清く正しいルチェリールタさんにと  
ですが、失望しました。魔族とあんなこと  
を……」

ルチェリールタ「……」

タールク「否定しないんですね。これで、た  
めらうことなく闘えます。この立場につい  
ている以上私は手を抜けないので……死な  
ないように。私だって成長しています」

タールク、レイピアを抜いてルチェリ  
ールタに向ける。ルチェリールタも、  
静かに剣を抜く。

レイピアに雷がまとわれていく。

男B「それでは……決闘開始！」

高台から男の大きな声。

それと同時に、2人が動く。

タールク「はっ！」

タールクの一閃。

ルチェリールタ、それを真顔で剣で受  
け止める。

タールク「くっ！」

○（回想）プリマダンケ騎士団本部・訓練場

ルチェリールタとタールク、向かい合う。

それを見ているプリマダンケ騎士たち。

タールク「よろしくお願いします」

ルチェリールタ「うん」

タールク、ルチェリールタに迫る。

2人の騎士の激しい戦闘。

タールク、吹っ飛ばされてしりもちをつく。

タールク「まだまだですね、私も。もっと精進します」

ルチェリールタ♀「がんばって、あなたならかならずできる」

（回想終わり）

○闘技場・屋外

タールク「あなたはいったい何をしようとしているのですか！」

タールクの連撃。それを全て受け止めるルチェリールタ。

ルチェリールタ「私は、世界を救うために旅をしてる」

タールク「ならなぜあんな破廉恥なことを！  
私はあなたに憧れてたのに！」

ルチェリールタ「タールクの憧れは、強い騎士じゃなくてえっちじゃない騎士だったの？」

つばぜり合い。

タールク「私、あれから修行したんですよ……」

ルチェリールタ「すごいね」

ルチェリールタ、にこっと笑う。

タールク、剣の雷を増幅させ、

タールク「一閃残光……大和撫子！」

一瞬にも満たない時間で、ルチェリールタに向かって素早く突進。

ルチェリールタ「はあっ！」

ルチェリールタ、剣を振ってタールク

のレイピアを弾く。

タールク、

タールク「まだ、あなたには勝てませんね」

タールク、ゆつくりと両手をあげる。

タールク「降参します」

チビィ「か、勝った……」

客席からルチェリールタを見ているチビィ。

男B「タールクの降伏により……ルチェリールタの勝利とする！」

高台から男が試合終了を宣言。

観客、それを聞いてざわざわし始める。

○同・待機室

2人の決闘を中継で見ていたニュンリンとシャーニューニダ。

扉が開き、ルチェリールタが待機室に入ってくる。

ニュンリン「ルチェリールタ！ 勝ったんだね！」

ルチェリールタ「うん」

男A「審査の結果、あなたの無罪が認められました。晴れて自由の身です」

ルチェリールタ「！」

ルチェリールタ、顔をしかめる。

ルチェリールタ「やっぱり、この国でも単純に勝利で無罪ってわけじゃない……2人も、気をつけて」

男「それでは、次の出場者を決めてください」  
シャーニューニダ「俺が行こう」

○同・屋外

T「1日後」

男B「シャーニューニダの勝利！」

タールク、膝をつく。

シャーニューニダ「ま、なんとかあったな」  
タールク「強すぎる……いったいルチェリールタさんはどんな敵と闘おうとしてるの……」

○同・待機室

シャーニューニダ「はつきり言って余裕だったな。ルチェリールタが勝てたならなおさらだ。これでニュンリンも、多少は不安が消えただろ。あいつは我らからしたらそこまで強くない」

ニュンリン「シャーニューニダ、まさか、あーしのために」

ニュンリン、シャーニューニダをじつと見つめる。

ルチェリールタ「ニュンリン、安心して。ニュンリンなら……」

○同・屋外

T「さらに1日後」

ニュンリンとタールク、向かい合う。

男B「それでは……決闘開始！」

高台にいる男の声が響く。

ニュンリン「来る……！」

タールク「はっ！」

タールク、一瞬でニュンリンの目の前に接近。

ニュンリン「はあっ！」

ニュンリン、糸を目の前に出現させる。

糸が、レイピアを受け止める。

ニュンリン「やった、糸はまだ通じる……はあっ！」

ニュンリンのもとに魔素が集まってくる。

ニュンリン、魔族態に変化。

タールク「なら、これはどうだ？」

タールク、再び剣を構える。

ニュンリン「う……いや、いける！」

ニュンリン、表情をひきしめて蜘蛛の足を構える。

ニュンリン「あーしの毒は」

○（回想）同・待機室

ルチェリールタ「やっぱり、この国でも単純に勝利で無罪ってわけじゃない……2人と

も、気をつけて」

○夕杜の宿屋・廊下

一行が廊下を歩いている。

ルチェリールタ「ニュンリン」

ルチェリールタ、ぴたっと立ち止まり、

ニュンリン「何？」

ルチェリールタ「これから、ゆっくりでいいから……償って、誰よりも優しい魔族になってね。ニュンリンなら、きっとなれるから」

ニュンリンに笑顔を向ける。

ニュンリン「……うん！」

ニュンリン、うなずく。

（回想終わり）

○同・屋外

ニュンリンM「あ……」

タールク「隙あり」

タールクの一閃。

ニユンリン「ぎゃあっ！」

鮮血が飛び散る。

ニユンリン「ぎゃああっ！」

ニユンリンの体から、どくどくと血があふれ出す。人間態に変化。

自分の体を見る。

血がどんどん流れている。

体を触り。手に血がべっとりとつく。

ニユンリン「あ、ああああああ……」

ニユンリンの顔が恐怖でゆがむ。

※ ※ ※

(フラッシュ)

ニユンリンの両親が髪の毛に刺される。

※ ※ ※

ニユンリン「いやあああああああ」

ニユンリン、悲痛の叫び声をあげる。

ニユンリン「ど、毒を使わなきゃ……」

タールク、じりじりとゆっくりニユン

リンに近づく。

シャーザベスラ「力が減ったとはいえ、ニユ

ンリンの強さなら負けるはずは……っ！  
しまった！」

客席のシャーザベスラ、その場で勢いよく立ち上がる。

チビィ「どうしたんだよ？」

シャーザベスラ「読み違えた！ ニュンリンは……優しくなっちゃったんだ！」

○（回想）夕杜王国・街道

芽里、宙を歩いてゆつくりと降りてくる。

芽里「ニュンリンを殺したら、ルチェリールタさんの心が崩壊してしまいますよ……」

（回想終わり）

○闘技場・屋外

シャーザベスラ「降参できないルール！ このままじゃまずい！ ロンリ」

水の鯨を出現させるが、

ヨナ「待つのヨナ！」

ヨナに瞬時に凍らされてしまう。

○同・待機室

ルチェリールタ「まずい、負ける！」

ルチェリールタ、扉に手をかける。

シャーニューニダ「待て、リングに出ていけ

ば反則負けになるぞ」

ルチェリールタ「で、でも！ あのままじゃ

殺される！ 決闘だから！ 向こうは公平

公正のために、殺すつもりで全力を出さな

いといけない！」

ルチェリールタ、目に涙を浮かべて焦

っている。

シャーニューニダ「待て！」

シャーニューニダ、ルチェリールタを

羽交い絞めする。

ルチェリールタ「私が！ 優しい魔族になっ

てなんて言ったせいで！ 人の痛みを知っ

たから！ 眠る毒すら使えなくなってる！

嫌だ！ 死なないでよ！ ニュンリン！」

ルチェリールタ、泣きながら羽交い絞めを抜ける。

○同・屋外

ニユンリン「あ、ああああ」

ニユンリン、恐怖で震えている。

タールク「これで終わりだ……一閃残光・大和撫子」

それと同時に、扉が勢いよく開けられ、

ルチェリールタが出てくる。

ルチェリールタ「ニユンリン！」

ルチェリールタ、超スピードでタールクに向かって飛ぶ。